

厚幌 1 遺跡

— 厚幌ダム建設に係わる一般道道切替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 —

2003.3

厚真町教育委員会

巻頭カラー1



上:厚幌1遺跡近景(東から)
平成14年9月20日撮影
左:厚幌1遺跡 基本土層堆積状況

I 調査の概要

1. 調査要項

事業名：厚幌ダム建設事業 一般道道上幌内早来停車場線切替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道 室蘭土木現業所

受託者：厚真町教育委員会

遺跡名：厚幌1遺跡（J-13-25）

所在地：北海道勇払郡厚真町字幌内487-1

調査面積：4,010㎡

受託期間：平成14年4月10日～平成15年3月25日

発掘期間：平成14年8月7日～平成14年11月15日

2. 調査体制

厚真町教育委員会 教育長 幅田 敏夫

生涯学習課 課長 長橋 政徳

係長 木戸 達也

臨時職員 乾 哲也（調査担当者）

臨時職員 乾 希（調査員）

臨時職員 佐々木 都（事務員）

発掘調査作業員 31名 整理作業員 14名

3. 調査にいたる経緯

厚真町は太平洋に注ぐ流路52.3kmの二級河川厚真川の流域に広がる農業の町で、中下流域の沖積平野には約3,700haもの水田地帯が広がっている。このため、春の灌漑用水の確保は勿論のこと、融雪期や豪雨による洪水への治水対策が開拓期以来の課題とされていた。昭和45（1970）年、河口より38km地点の厚真川上流域に、農業用ダムである「厚真ダム」が完成した。しかし、その後も度重なる洪水や河川流況が不安定なため用水不足が生じ、代かき期間の短縮、深水かんがい等近年の営農方法への不備が生じている。このため、新たにダム建設が陳情され、平成7（1995）年に洪水調節、灌漑用水、水道用水の確保、流水の正常な機能維持を図るべく多目的ダムとして、厚真ダム下流に「厚幌ダム」の建設着工が決定された。厚幌ダムの本格着工として、平成14年度より水没地域内の用地買収と一般道道上幌内早来停車場線の切替工事に着手している。

今回の発掘調査は、この道道切替工事に伴うもので、平成12年7月に北海道室蘭土木現業所厚幌ダム建設事務所より、厚幌ダム建設に伴う道道切替工事前協議書が厚真町教育委員会（以下、町教委）を經由して北海道教育委員会（以下、道教委）へ提出された。これにより、道教委が平成12年10月に「所在確認調査」を行い、同年12月に切替路線延長約5.4kmのうち、キウキチ沢の左岸の河岸段丘面を要試掘と報告された。

試掘調査は、道教委により平成13年6月26～28日の3日間にわたって行われた。重機により33ヶ所のトレンチが掘開され、7ヶ所から下層の黒色土、V層より縄文時代後期の余市式土器等が出土した。また、調査区の西端に比高差約2mのマウンド状の地形があり、樽前c降下火山灰を被覆していることから、余市式期の盛土遺構の可能性が指摘された。これにより、マウンド状地形までを

含めた8,250㎡が要発掘調査面積として報告された。

これをうけ、道教委、町教委、室蘭土木現業所の三者で協議したところ、厚幌ダム事業が厚真町行政区域内のみの事業であることなどから、道教委の指導、援助のもと、町教委が2ヵ年計画で発掘調査を受託することとなった。

発掘調査は、周辺用地の確保等の都合により、当初計画より約2ヶ月遅れた8月7日より着手した。

Ⅱ 調査の方法

1. グリッド設定

道教委の発掘調査必要面積は、道路敷設に伴い盛土される範囲であったが、今後農業用水路敷設等で周辺部の発掘調査が考えられることから、グリッドは、厚幌1遺跡の包蔵地が広がると思われる河岸段丘面全域に設定した。グリッド配置は、日本測地系成果に基づく公共座標に合わせて、5m×5mに区切り、南北のX軸にアルファベット、東西のY軸にアラビア数字でグリッドラインを設けた。起点A-1杭(X: -20925.0 Y: -137490.0)は北東コーナーで、南へA・B・C・・・、西へ1・2・3・・・とし、各グリッド名も北東コーナーの杭名の呼称とした。現地におけるグリッド設定は、既に公共座標値の判明している用地境界杭6点を機械点、後視点として逆トラバース計算表を作成し、光波式トータルステーションを用いて行った。

2. 包含層および遺構調査

発掘区の大半は、樹齢約45～50年のカラマツの植林地で、伐採の後、表土・火山灰除去を行った。火山灰除去は、遺物包含層がV層黒色土であることから、上層の表土、樽前b降下火山灰、Ⅲ層黒色土、樽前c降下火山灰を、調査員立会いのもとバックホーにより行った。この時、カラマツの根が包含層まで達していることから、抜根作業を中断した。火山灰除去掘削中にⅢ層黒色土から灰層を伴う炉を確認し、周囲からも礫が多数出土していることが分かり、急遽、樽前b降下火山灰までの除去と変更となった。

火山灰除去後、人力でジョレンを用いてⅢ層上面を清掃し、残存範囲を記録した。包含層調査は、基本的に移植ゴテで面的に掘り下げたが、遺物出土面以外のⅢ層下位、V層下位はジョレンにより掘り下げ、Ⅳ層およびⅥ層上面で遺構確認を行った。一部残存した樽前c降下火山灰は、重機と人力を併用して除去し、V層上面で、ラジコンヘリコプターを用いた空撮による地形測量を測量会社に委託して行った。

遺構は検出後、半断し、調査員が堆積状況を実測した後、完掘した。エレベーションおよびプランは光波式トータルステーションで実測した。遺構等の写真撮影は、リバーサル・モノクロフィルムを35mm一眼カメラ、メモ用としてネガカラーフィルムをコンパクトカメラ、市販のデジタルカメラを用いて、各調査員が撮影した。

Ⅲ 遺跡の位置と環境

1. 厚真町の概要

(1) 地理的環境

厚真町は、北海道胆振支庁の東部に位置し、夕張山地南部から太平洋に注ぐ、二級河川厚真川流域を中心に広がる人口5,313人(平成15年2月28日現在)の町である。面積は406.09km²で、厚真川

流域に沿って南北に細長く、南は太平洋に面し、約6kmの砂浜の海岸線が続く。東には穂別町、鵜川町、西に苫小牧市、早来町、北に夕張市、由仁町に接している。町は大きく4つに分かれ、厚真川筋に南部の浜厚真・上厚真地区、中部の厚真地区、北部の幌内地区があり、東部には入鹿別川沿いの鹿沼地区がある。市街地は幹線道路が交差する中部の厚真地区に形成されている。

厚真町の町名語源は3説ほどあるが、最も有力な説として「アットマム」(向こう湿地帯)で、河川や特定の場所につけられた地名ではなく、南部に広がる湿地帯につけられたものと考えられている。

南部の浜厚真地区は砂浜が続き、かつては、平行して比高差10m前後の砂丘列が形成されていたが、現在は、砂利採取や港湾開発によりほとんど消滅している。苫小牧東港の一部も厚真町域で、フェリー埠頭の他、道内最大の火力発電所である北海道電力厚真火力発電所も立地している。また、国道や鉄道があり、道央部から日高方面への幹線路となっている。この他、高規格道路の建設も進められており、平成14年度には浜厚真3遺跡の発掘調査も、(財)北海道埋蔵文化財センターにより行われた。

海浜部の砂丘列と内陸部の台地との1.5～4kmの間は湿地帯で、現在は排水路が整備されている。しかし、6月から7月にかけて海霧が侵入し、冷涼な気候であるため酪農や軽種馬をはじめとする畜産業の放牧地、採草地になっている。南部の中心市街である上厚真市街は、大正11年の北海道鉄道株式会社によって開通された金山線の上厚真駅開所により、大きく発展するようになった。

南部から中部にかけては、厚真川流域や支流の沖積平野には広大な水田地帯が広がり、後背地の支笏火山灰による低平な台地は樹枝状に開析され、湿地や海跡湖が多数存在している。地形的には、苫小牧東部の静川・柏原台地と類似した地形でもある。

中部の厚真市街は、厚真川本流と知決辺川、ウクル川などの合流点付近に位置し、鵜川方面、穂別・平取方面、早来方面、浜厚真方面への道道交差部に形成されている。かつては、幌内地区からの森林資源や宇隆地区の石油資源などの集散地として発展し、早来まで鉄道も敷設されていた。

中部から北部にかけては、夕張山地の南端部が迫り出してくるため、沖積平野は厚真川流域のみに限られ、左岸にはやや広い河岸段丘が形成され、畑作地が広がっている。

北部は、厚真川流域に形成されていた沖積平野の最奥部、厚真川本流と日高幌内川、シュルク沢川の合流点付近に幌内市街が形成され、昭和24年まで鉄道が敷設され、木材や木炭が移出されていた。幌内市街からは、狭い山間部へと入り、厚真川の上流域となる。厚真川の源流は河口から52.3km、夕張市との行政区画境界付近まで遡る。本流や支流沿いには林道も敷設され、穂別や夕張市滝ノ上へのルートがある。

(2) 歴史的環境

A. 先史時代

厚真町内には、現在83ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が掲載されている。時期は縄文時代早期から近世末のアイヌ期まであり、今のところ旧石器時代の遺跡は確認されていない。しかし、厚真町との境界付近に所在する静川5遺跡では、蘭越型細石刃核をはじめとする後期旧石器の石器群が出土しており、今後、町内においても発見される可能性が高い。地域的には苫小牧東部工業地帯の開発に伴う埋蔵文化財調査により、共和地区に集中する傾向にあるが、近年の農地造成や火山灰採取等による確認調査で掲載遺跡数が急増し、平成14年度は11ヶ所の遺跡が新規掲載された。立地は殆どが湿地の後背地や小河川沿いの台地縁辺部、厚真川本流の河岸段丘縁辺部で、低地での遺跡は確認されていない。ただし、地点不明であるが昭和32年に東厚真川岸よりほぼ完形の長頸壺の須恵器が出土している。

町内の遺跡の殆どは縄文時代に残されたもので、縄文早期後半の東釧路系土器群の時期からはじまり、中期の遺跡数をもっとも増加する。後期は初頭までは遺跡数が多いものの、中葉以後は極端に減少し、晩期にやや増加する傾向にある。続縄文時代は遺跡数は少なく、擦文時代、アイヌ期においても遺跡数は少ない。各時期における遺跡数の偏りは苫小牧市における傾向と一致している。

町内での組織的な発掘調査は昭和37年に朝日遺跡、共和遺跡が厚真村郷土研究会により行われたのが初見である。昭和48年からは苫小牧市埋蔵文化財調査センターにより苫小牧東部工業地帯で試掘・発掘調査が始まり、昭和59年までの12年間で、厚真町域では新規登録13ヶ所、発掘調査9ヶ所が行われた。時期は縄文早期～擦文期までであり、厚真1遺跡では縄文時代中期中葉の円筒上層式系の土器がまとまって出土し、「厚真1式」の基準資料となっている。

近年、開発に伴う試掘調査や発掘調査、工事立会が増加し、豊川1遺跡(長橋・田才 2001)、鯉沼2遺跡(西脇・宗像他 2001)などがある。また、高規格道路日高自動車道の建設にあたって、(財)北海道埋蔵文化財センターにより浜厚真3遺跡が調査され、多数のTピットが検出されている。

厚真川上流部の幌内地区においては、平成13年度より、厚幌ダム建設に関わる埋蔵文化財確認試掘調査が北海道教育委員会により行われ、現在のところ新たに6遺跡が発見されている。今後、厚幌ダム建設に伴う発掘調査が継続されて行われる予定である。

B. 歴史時代

厚真町に関わる最初の記録は1692年に「続々群書類従 蝦夷記」のなかで、シャクシャイン蜂起に関わる「於多久具印」が「阿津摩」にて討ち取られるという記述である。町内における唯一のチャシ「桜丘チャシ」は丘先式で、厚真川の沖積平野よりかなり奥まった位置にある。壕も上幅で11m以上あり戦闘的要素を伺わせることなどから、この時期に構築、使用された可能性もある。それ以前のコシャミン蜂起では太平洋は鶴川までが和人の居住が記録され、1640年、駒ヶ岳の噴火で浜厚真へ30戸ほどのアイヌが避難してきたとの伝説がある。

その後、18世紀末にはアツマ場所として松前藩士 厚谷伴蔵の給地で干鮭や椎茸、シナ縄が産物として挙げられている。また、ほぼ同時期の八王子千人同心も隣接地区の勇払や鶴川に移住しており、和人の定住が進むようになる。幕末期の安政5(1857)年には松浦武四郎が、勇払から厚真川河口を経て、厚真川を遡り、現富里にて2泊している。この時、厚真町内には現浜厚真のアツマ、現厚和のキムンコタン、現厚真市街新町のシナイ、現富里のトンニカ、比定地不明のヲフムセナイの5ヶ所のコタンが記されている。また、畑作が盛んで粟を栽培していることや番犬、猟犬として厚真犬が活躍していることも記載されている。

明治6年には勇払郡役所の所管で、勇払郡16ヶ村のうちの厚真村が行政単位としてはじまる。明治前半は南部に和人の開拓が入るだけであったが、明治20年代より町内各地に和人の本格的入植が始まり、農業開拓の他、手掘り掘削による石油採掘もはじまる。また、この時期に開拓使によるアイヌへの勧農事業として町内のコタンを統合し、西老軽舞(現吉野)に移住し、私塾も設置されるようになり、厚真町の胎動期ともなる。厚真町の開村は明治30(1897)年で、苫小牧村から独立し、振老(現桜丘)に戸長役場が設置されたことによる。

2. 遺跡周辺の環境

厚幌1遺跡は幌内地区より約3.6km厚真川上流部に入った山間部に位置し、厚真川本流とキウキチ沢との合流点西側の河岸段丘上に立地する。標高57~62mの緩い西向きの傾斜を有する平坦面に広がる。遺跡の南側には、比高差約110mの山体があるため発掘区南側は極めて日当たりが悪く、こ

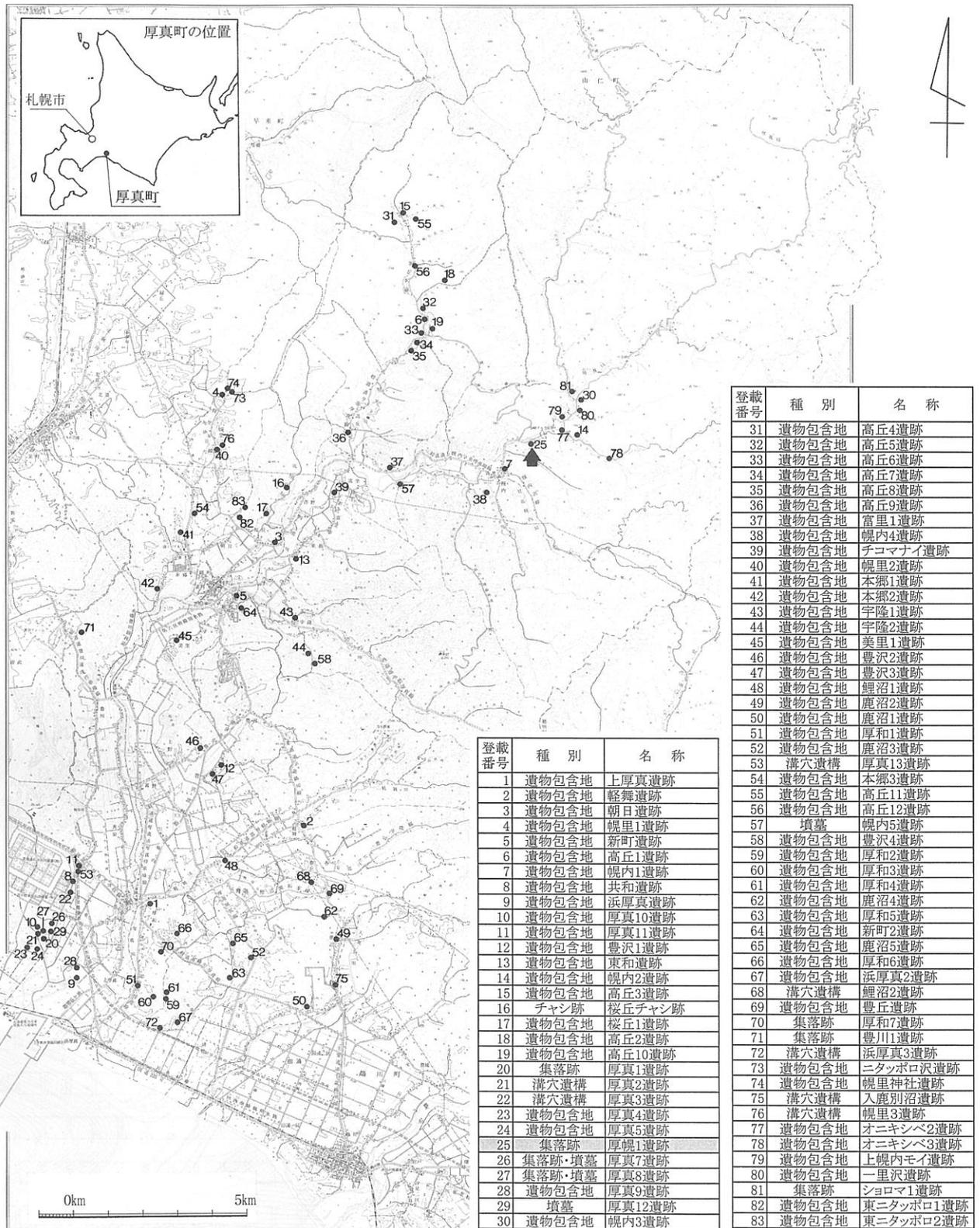


図1 厚真町内の埋蔵文化財包蔵地分布図

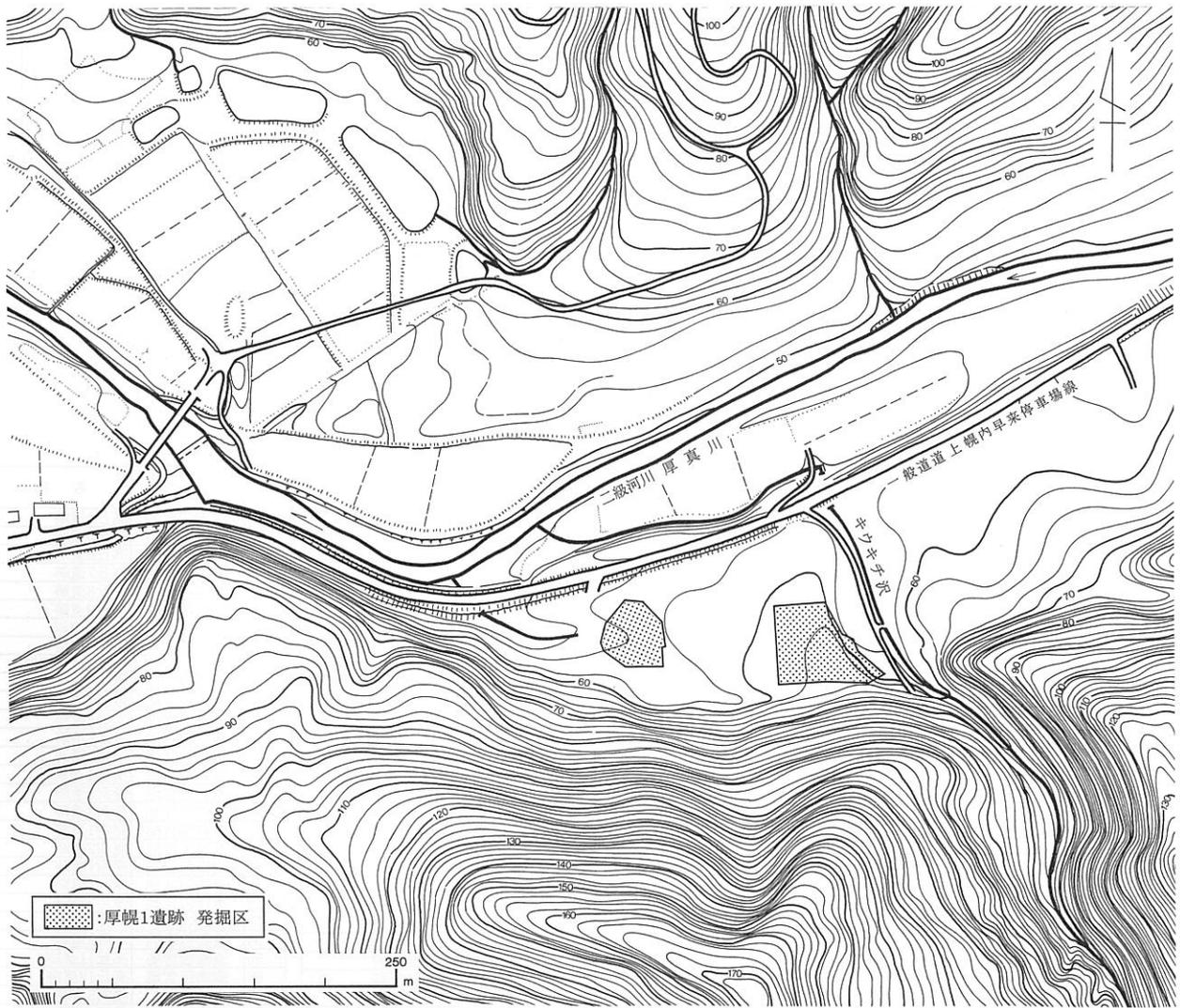


図2 厚幌1遺跡 周辺地形図 (S = 1 : 5,000)

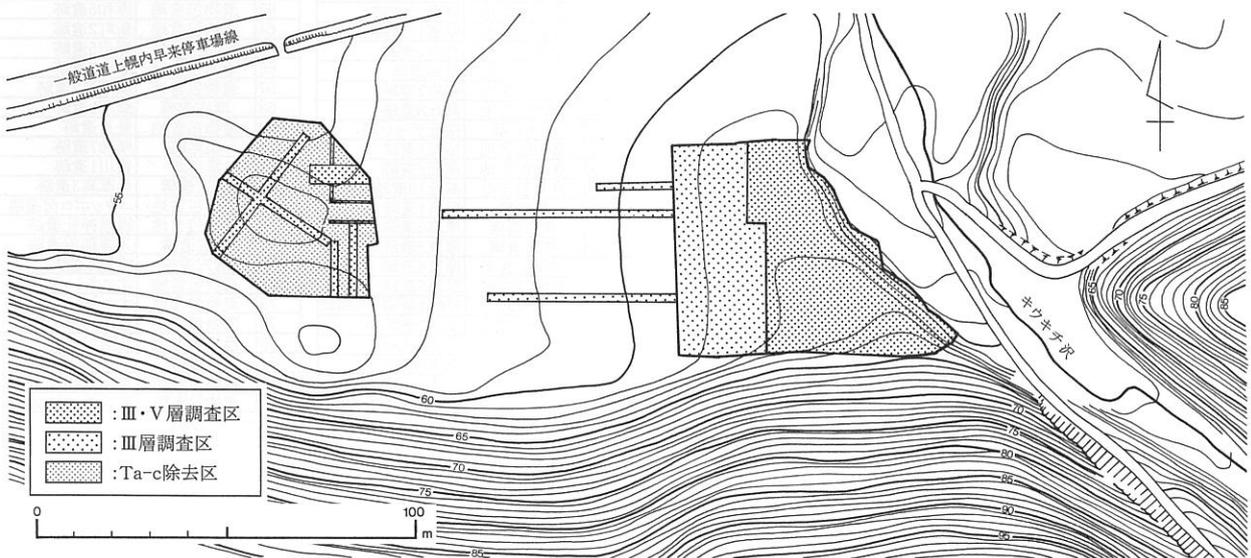


図3 厚幌1遺跡 現況図 (S = 1 : 1,000)

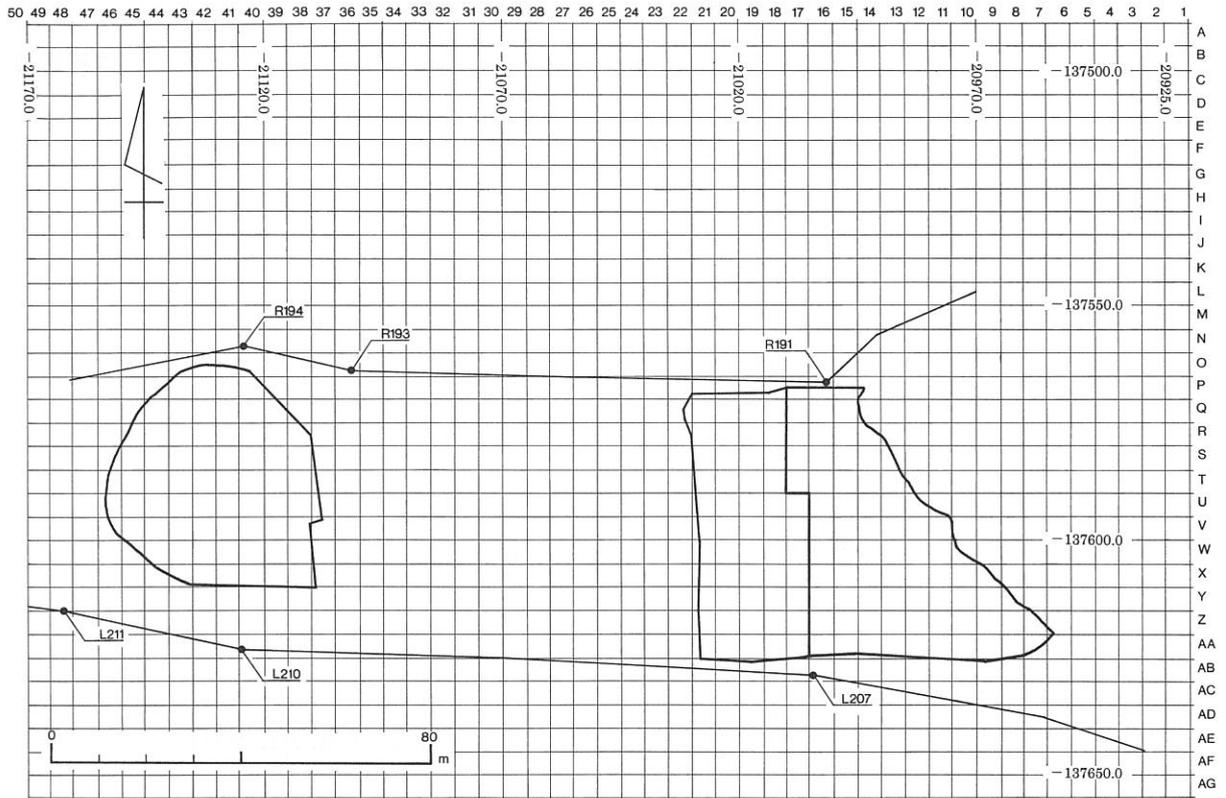


図4 グリッド配置図

● 61.400m

● P-17区 基本土層トレンチ堆積図 土層注記

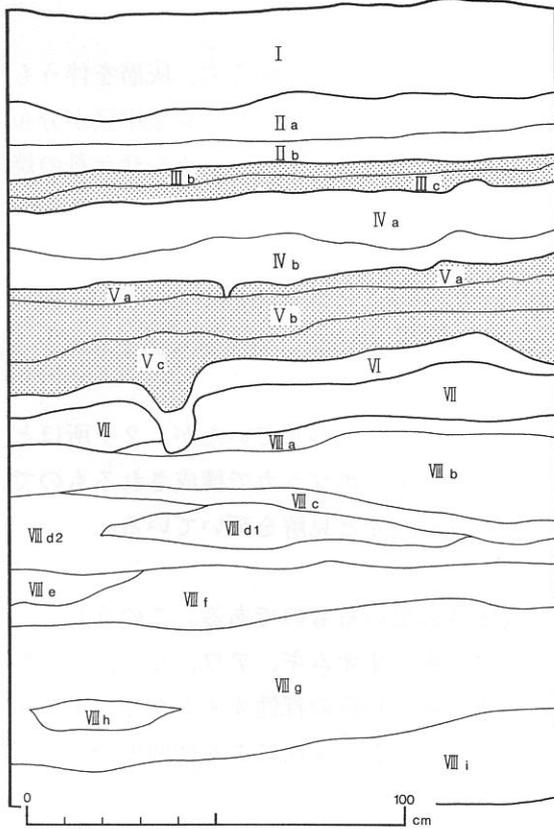


図5 基本土層柱状図 (P-17区トレンチ)

- I 表土層 (25 cm) 10YR 3/1 黒褐色 一部に耕作痕を確認。
- II 樽前b降下軽石 (Ta-b) 層 (20 cm) : 1667 (寛文7) 年降下
 - a : 10YR 8/2 灰白色 粒径2mm以下。
 - b : 10YR 8/2 灰白色 粒径5mm以下。
- III 黒色腐植土層 (10 cm) : 中近世アイヌ期の遺物包含層
 - a : 7.5YR 2/1 黒色 層厚1cm前後。II層火山灰を斑状に含む。
 - b : 10YR 1.7/1 黒色 上位は中近世アイヌ期の遺物包含層
 - c : 10YR 2/2 黒褐色 IV層への漸移層
- IV 樽前c降下軽石 (Ta-c) 層 (20 cm) 降下年代: 約2,300~2,500年前
 - a : 10YR 4/4 褐色 風化ローム質 b : 2.5Y 6/3 にぶい黄色 細粒のパミス
- V 黒色腐植土層 (20 cm) : 縄文期の遺物包含層
 - a : 7.5YR 2/3 極暗褐色 IV層斑状に少量含む
 - b : 10YR 2/1 黒色 Ta-d パミス、シルト岩少量含む。縄文期の遺物包含層。
 - c : 10YR 2/3 黒褐色 角礫状シルト岩多量に含む。
- VI 漸移層 (5 cm) 7.5YR 4/6 褐色 シルト岩多量に含む。縄文期の遺構確認面。
- VII 樽前d降下軽石 (Ta-d) 風化ローム層 (10 cm) 7.5YR 5/8 明褐色
 - 降下年代: 約8,000~9,000年前
- VIII 河岸段丘再堆積物層: 樽前d軽石、砂粒を主体とする再堆積層
 - a : 10YR 5/6 黄褐色シルト層 b : 2.5YR 5/2 暗灰黄色シルト層
 - c : 5YR 4/8 赤褐色 樽前d降下軽石層 d1 : 10YR 5/6 黄褐色シルト層
 - d2 : 7.5YR 5/6 明褐色シルト層 e : 5GY 6/1 オリーブ灰色砂層
 - f : 2.5Y 6/4 にぶい黄色混土礫層 g : 10Y 6/1 灰色砂層
 - h : 5Y 5/2 灰オリーブ色混土礫層 i : 2.5Y 5/4 黄褐色シルト層

の範囲は遺物点数が極端に少なかった。

発掘前の現況は、発掘区の大半が樹齢45～50年のカラマツの植林地であった。植林前は耕作地として使用されていたらしく、一部の発掘区壁面で耕作痕が観察できた。また、支流のキウキチ沢は、この近辺に入植した藤根キウキチ氏の名前に由来するものでもある。

周囲の植物は、用材目的の伐採や木炭生産により、本来の植生は全く残っていないが、発掘区に隣接する急斜面には直径1 m以上のカツラなどの広葉樹の古い切り株が数多くあり、台地上や山地ではナラ属やカバ属、カツラなどの広葉樹林が広がっていたものと思われる。また、厚真川やキウキチ沢の氾濫原はヤナギが密生しており、クルミ属が意外と少ない。草本類はササが圧倒的優で、その他の草本類は極めて少ない。部分的にオオウバユリが見受けられ、緩い沢状地があるものと思われる。

3. 基本層序

5万分の1地質図幅説明書「早来」によると遺跡周辺の基盤層は、「振老層」と称される礫岩と砂岩・泥岩の互層からなる新第三紀の堆積岩層で、付近の厚真川岸の崖面で水平堆積の互層が観察できる。

厚幌1遺跡の所在する河岸段丘面は、基盤堆積岩層を灰白色のシルト層が被覆している。この上層に、発掘区の東側はキウキチ沢から流出したと思われる樽前d降下火山灰を主体とする再堆積層が発達している。発掘区西側はプライマリーな樽前d降下火山灰の堆積が認められている。基本層序は図5にP-17区のトレンチ堆積柱状図で示す。

IV 遺構と遺物

1. Ⅲ層の遺構と遺物

焼土(6ヶ所)

いずれも周辺に柱穴が検出されなかったことから、屋外炉と思われる。このうち、灰層を伴うものが3ヶ所、灰層を伴わないもの3ヶ所検出した。後者の周辺には焼骨片を含む獣骨集中区が分布していることから、掻き出し、投棄されたものと思われる。灰層中からは、エゾシカやサケ科の焼骨片が出土している。

集石(6ヶ所)

構成する礫は、平均値が長軸7.96cm、短軸3.38cm、厚さが2.02cmの棒状ものが多く、被熱、破碎しているものも数多くある。また、ⅢSB-01に隣接して内耳鉄鍋(写真図版6-1・2)も出土している。

獣骨集中区(8ヶ所)

大きく5地点に分布する。殆どが未被熱のもので、歯冠部を中心に残存していたが、2ヶ所ほど四肢骨などが集積された状態で出土している。これらは同定の結果、エゾシカで構成されるもので、苫小牧市静川22遺跡や平取町オパウシナイ1遺跡に類似する性格ものと見解を頂いている。

炭化物集中区(27ヶ所)

大きく10地点に分布する。殆どは、炭化材や草本類で構成されているものである。このうち、発掘区中央部のものは、炭化種子の集中区で、同定の結果、アズキ、オオムギ、アワ、ヒエ、イナキビ、コナラ属、ブドウ属、クルミ属で構成されている。オオムギは短粒の裸性オオムギで、まともって出土した例として、道央部では初見である。現在、フローテーション法による微細種子を選別中である。

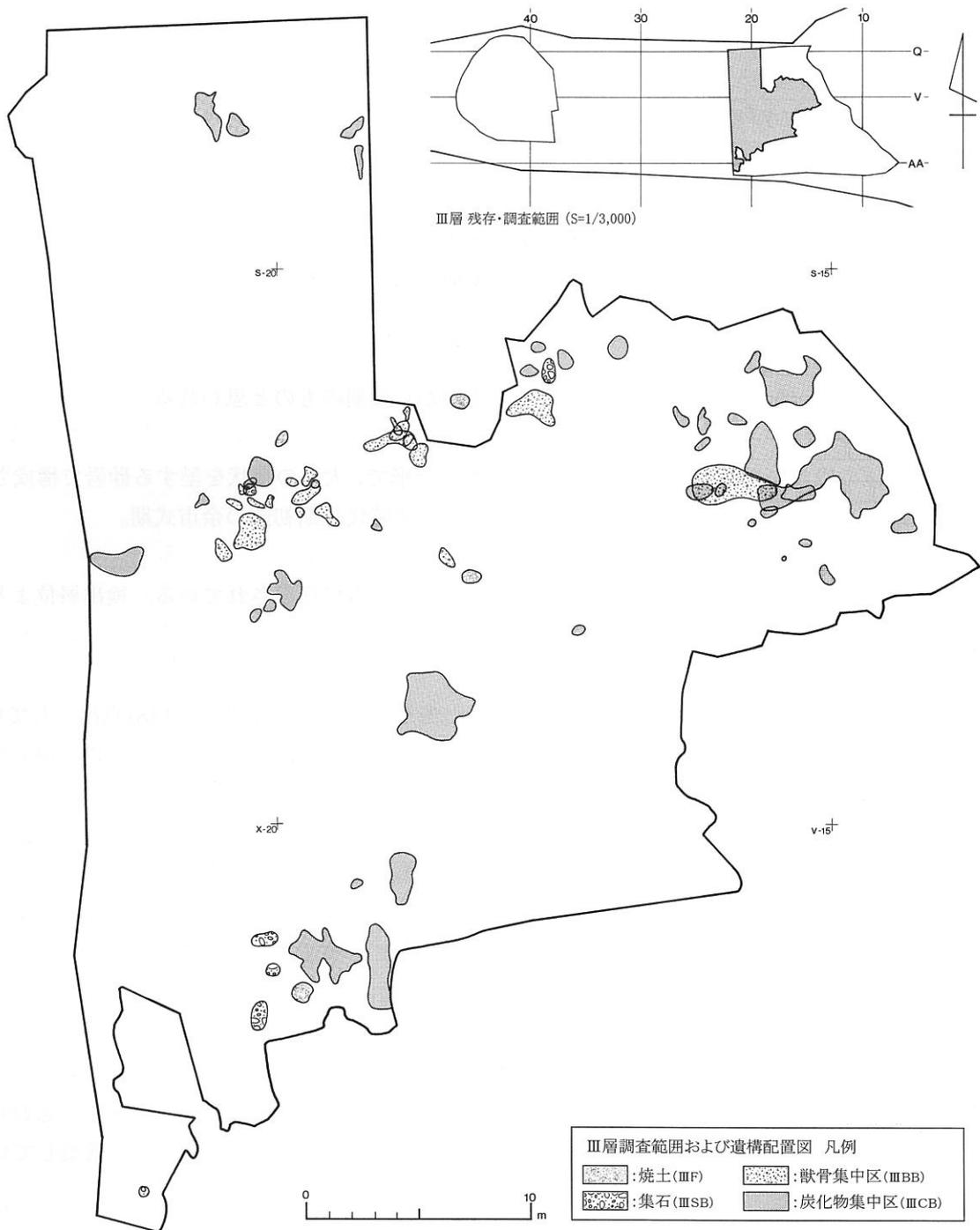


図6 III層遺構配置図

遺物

III層からは、中近世アイヌ期と続縄文時代前葉の遺物が1,250点出土している。続縄文期の遺物は土器1個体分が出土しているに過ぎない。遺物の殆どが礫で、棒状で石材が泥岩のものが多い。この他、砥石、内耳鉄鍋（一文字湯口、約3分の1残存：写真図版6-1・2）、鉤(5)、棒状鉄製品（鋼素材の可能性有 3）、星兜片（著しい細片化 7~10）、刀剣類切先（6）、鞋（4）が出土している。

2. V層の遺構と遺物

土坑（5基）

発掘区の中央部に集中して検出した。いずれも、プランが円形で深さが1m前後のものである。坑底は丸味をもつものが多い。堆積状況は中央部に黒色土が大きく落ち込み、覆土下層が壁面崩落土で構成されている。構築時期は不明である。

Tピット（7基）

発掘区南側から中央部にかけて分布する。溝状タイプと逆茂木痕を有する楕円形タイプがある。タイプは、再堆積層に構築されていることから、壁面が大きく崩れ、開口するものが多かった。今回の発掘区内では、明確な配列は確認できなかった。

焼土（3ヶ所）

1ヶ所は配石遺構に伴って形成されてもの。他は中期から後期のものと思われる。

配石遺構（3基）

P・Q-16区の段丘縁辺部で検出。いずれの配石も不定形で、大型の板状を呈する砂岩で構成されている。土坑などの下部遺構は伴わなかった。時期は縄文時代後期初頭の余市式期。

チップ集中（3ヶ所）

いずれも黒曜石のチップを投棄したもので、2つ以上の原石で構成されている。検出層位より、文中期のもの1ヶ所、後期のもの2ヶ所と思われる。

遺物

主体となる時期は縄文時代中期後半の天神山式期と後期初頭の余市式期で、3,181点出土している。Ⅲ層と同様、遺物の殆どは礫で、板状の砂岩が主体である。土器は、胴部で3分の1以上復元出来たものが3個体にとどまり、少量であった。余市式は横環する貼付帯が底部付近まで多段になる古手のもので、タプコブ式などの新しい時期のものは出土していない。剥片石器は黒曜石製のものが主体を占めているが、つまみ付きナイフは頁岩製のものが多い。礫石器は、砥石の比率が高く、包含層中の礫材質の偏りと合わせて、砥石石材の供給遺跡だった可能性も考えられる。この他、縄文時代前期の静内中野式が段丘縁辺部で僅かに出土している。この時期のものと思われる石錘も出土している。

3. 近現代（樽前b降下火山灰以降）の遺構

馬車道跡（1ヶ所）

発掘区中央部の段丘縁辺部に旧道の馬車道跡が検出された。当初、造林に伴う作業道と思われたが、地元古老への聞き取りで、旧道と判明した。段丘肩部を切り通し、裾部を盛り土構築している。轍跡と泥濘止めの横木（丸太材）が検出された。

4. その他

B地区地滑り再堆積土（1ヶ所）

試掘段階で樽前c火山灰を被覆する縄文期の盛土遺構と思われたが、調査の結果、段丘面背後の急斜面からの地滑り再堆積土と判明した。規模は40m×33m×2.3mで、皿状のマウンド地形をなしている。十字にトレンチを掘開したところ、樽前d火山灰が主体を占め、層状に堆積していた。再堆積土下のV層が厚く堆積していること、地滑り後、腐植土層が若干発達していることから樽前c火山灰降下よりやや古い時期かと思われる。また、北海道立地質研究所 田近 淳氏、大津 直氏に現地調査を依頼したところ、原因として地震災害による可能性があるのご教示いただいた。

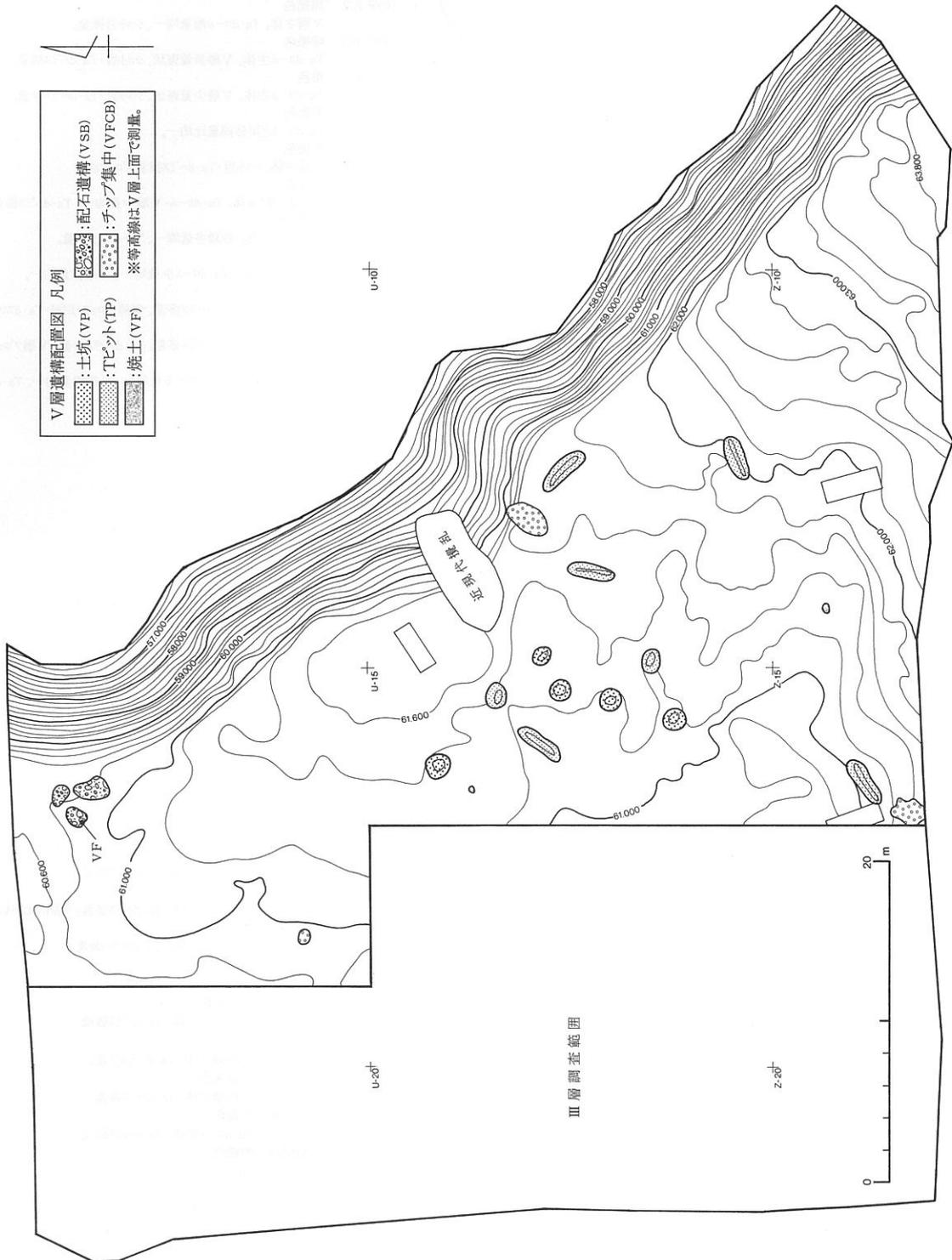
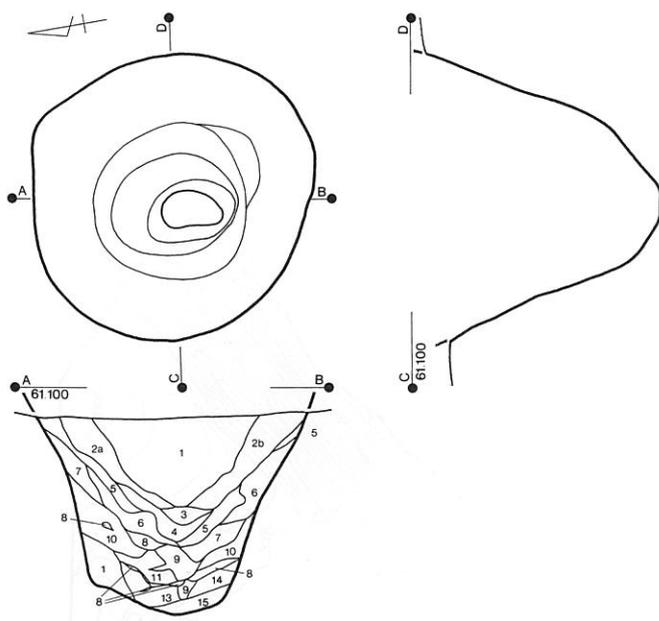
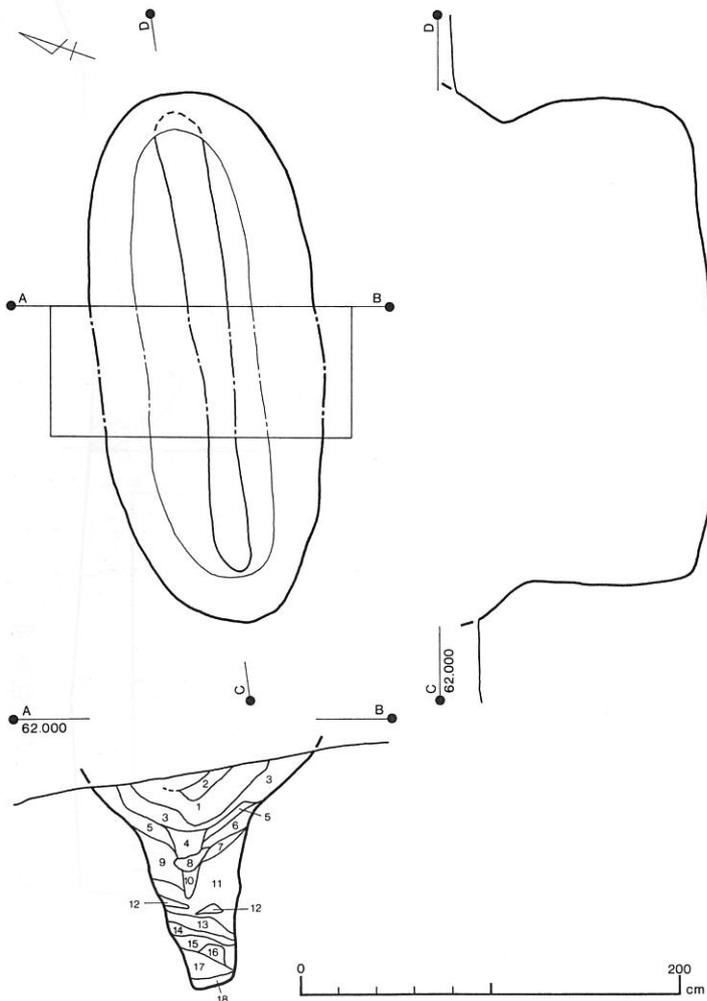


図7 V層遺構配置図



〈VP-01 土層注記〉

- 1 10YR 2/1 黒褐色
V層主体。Ta-dローム少量均一、シルト岩・Ta-dハミス多量。
- 2a 10YR 1.7/1 黒色
V層主体。シルト岩・Ta-dハミス微量。
- 2b 10YR 2/1 黒色
V層主体。シルト岩・Ta-dハミス微量。
- 3 10YR 2/1 黒色
V層主体。シルト岩・Ta-dハミス微量。
- 4 10YR 2/2 黒褐色
V層主体。Ta-dローム微量均一、シルト岩微量。
- 5 10YR 3/3 暗褐色
Ta-dローム主体。V層多量斑状、シルト岩・Ta-dハミス微量。
- 6 10YR 4/4 褐色
Ta-dローム主体。V層少量斑状、シルト岩・Ta-dハミス少量。
- 7 7.5YR 5/6 明褐色
Ta-dロームと川砂同量比均一。
- 8 10YR 2/2 黒褐色
V層主体。シルト岩・Ta-dハミス微量ブロック状。
- 9 10YR 3/3 暗褐色
Ta-dスコリア主体。Ta-dローム・V層少量均一、Ta-dハミス微量。
- 10 7.5YR 5/8 明褐色
Ta-dローム主体。砂礫多量均一、Ta-dハミス少量。
- 11 7.5YR 4/6 褐色
Ta-dスコリア主体。Ta-dローム少量均一、V層微量均一。
- 12 10YR 4/4 褐色
Ta-dローム主体。Ta-dハミス多量、IX層ブロック・川砂・Ta-dスコリア少量。
- 13 10YR 3/4 暗褐色
Ta-dローム主体。Ta-dハミス多量、Ta-dスコリア少量、V層ブロック微量。
- 14 7.5YR 5/8 明褐色
Ta-dローム主体。Ta-dスコリア多量均一、V層微量均一、Ta-dハミス少量。
- 15 5YR 4/8 赤褐色
Ta-dハミス主体。V層微量。



〈TP-02 土層注記〉

- 1 10YR 2/1 黒色
Vb層、黒色シルト層。
- 2 10YR 2/2 黒褐色
Vb層主体。Ta-dローム多量均一、Ta-dハミス少量。
- 3 10YR 3/2 黒褐色
Vb層Ta-dローム同量比斑状、Ta-dハミス少量。
- 4 10YR 3/3 暗褐色
Ta-dローム主体。黒色土少量均一。Ta-dハミス微量。
- 5 7.5YR 4/6 褐色
Ta-dローム主体。黒色土微量均一。Ta-dハミス微量。
- 6 5YR 4/6 赤褐色
Ta-dハミス主体。Ta-dスコリア微量。
- 7 5YR 4/8 赤褐色
Ta-dハミス主体。Ta-dローム多量。
- 8 7.5YR 3/3 暗褐色
Ta-dローム主体。黒色土少量均一。Ta-dハミス多量。
- 9 5YR 4/8 赤褐色
Ta-dローム主体。Ta-dハミス多量。
- 10 5YR 4/8 赤褐色
Ta-dローム主体。Ta-dハミス多量。9層に比べしまり弱い。
- 11 5YR 4/8 赤褐色
Ta-dハミス主体。Ta-dスコリア微量。
- 12 7.5YG 5/1 緑灰色
川砂層。Ta-dハミス微量。
- 13 5YR 3/6 暗赤褐色
Ta-dローム主体。Ta-dハミス微量。
- 14 10YG 5/2 オリーブ灰色
川砂層主体。Ta-dハミス少量。
- 15 5G 4/1 暗緑灰色
川砂層主体。Ta-dハミス微量。
- 16 7.5YR 5/6 明褐色
Ta-dローム主体。Ta-dハミス微量。
- 17 7.5YR 5/8 明褐色
En-aハミス層。
- 18 5YR 4/4 にぶい赤褐色
Ta-dハミス層。

図8 VP-01, TP-02



图9 出土遗物(1)

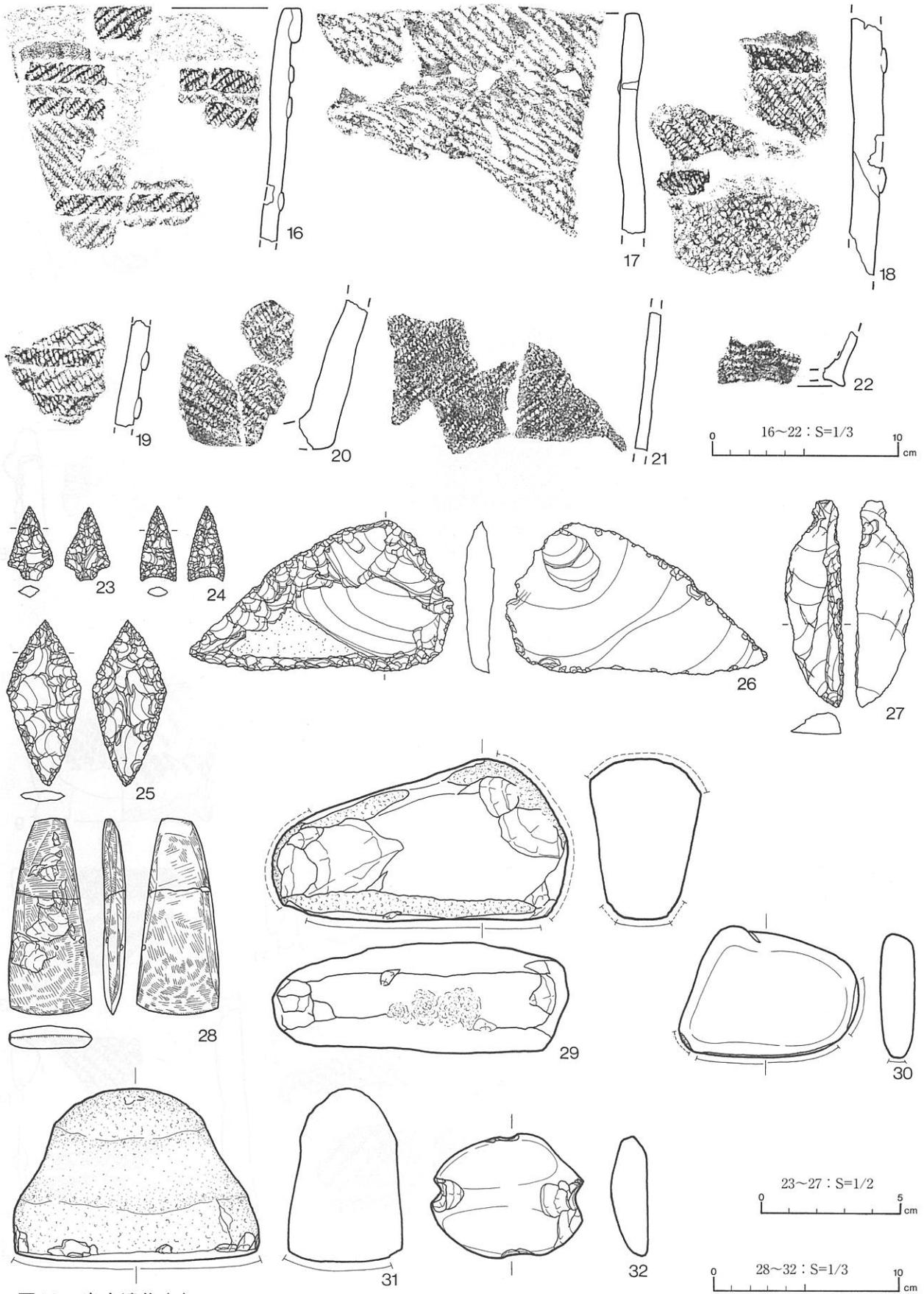


图10 出土遺物(2)



厚幌 1 遺跡近景 (東から)



B地区 V層上面全景 (地滑り再堆積土検出状況)



地滑り再堆積土 堆積状況



A地区 火山灰除去状況



A地区 遺物取上げ状況

写真図版 2



Ⅲ層 集石（ⅢSB-01）及び鉄鍋 出土状況



Ⅲ層 集石（ⅢSB-02）及び焼骨片 出土状況



Ⅲ層 集石（ⅢSB-02）及び焼骨片 出土状況



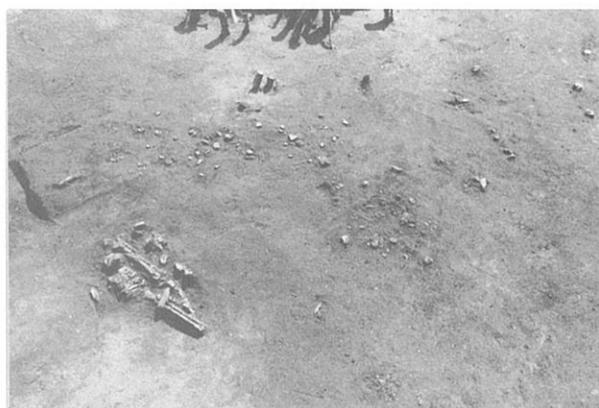
ⅢF-03 検出状況



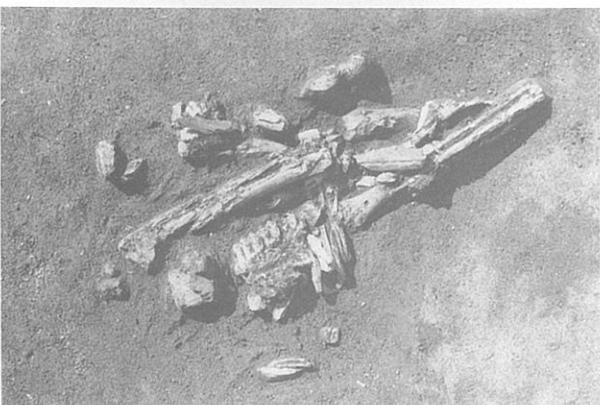
ⅢF-03 堆積状況



Ⅲa層 調査状況



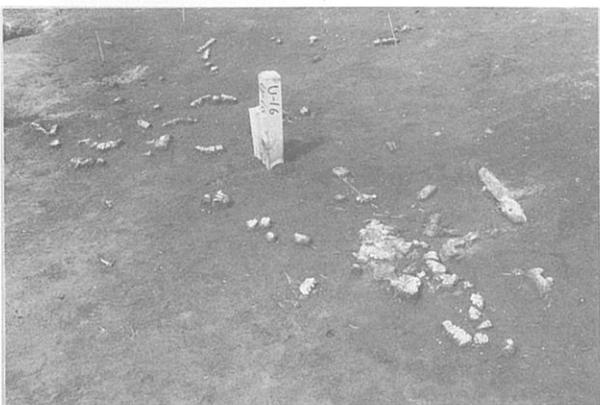
獣骨集中（ⅢBB-06）及び星兜片 出土状況



Ⅲb層 獣骨集中（ⅢBB-06）検出状況



Ⅲb層 星兜片 出土状況



Ⅲb層 獣骨集中（ⅢBB-03）検出状況



獣骨集中（ⅢBB-03 シカ歯冠列）出土状況

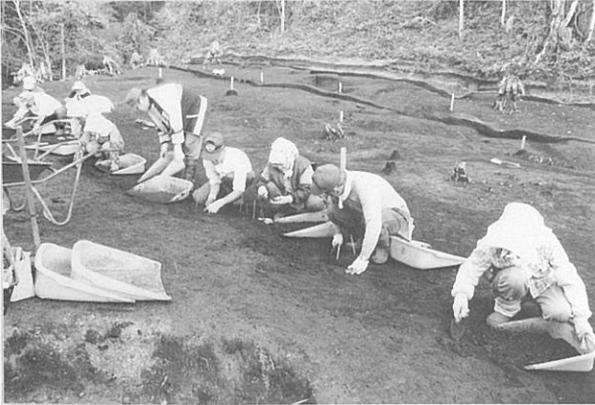


Ⅲ層 遺物出土状況

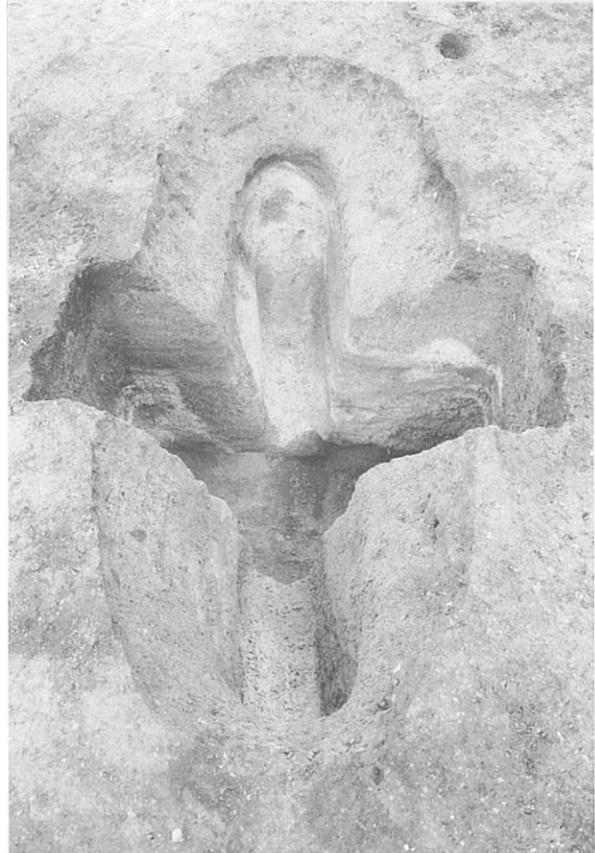


Ⅲb層 鉤 出土状況

写真図版 4



V層 包含層調査状況



TP-02 完掘状況



VP-02 完掘状況



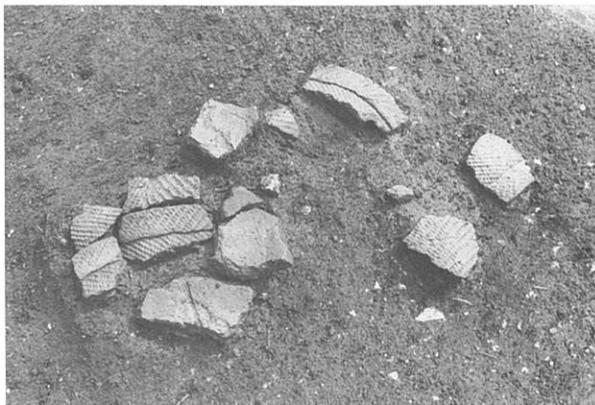
TP-02 堆積状況



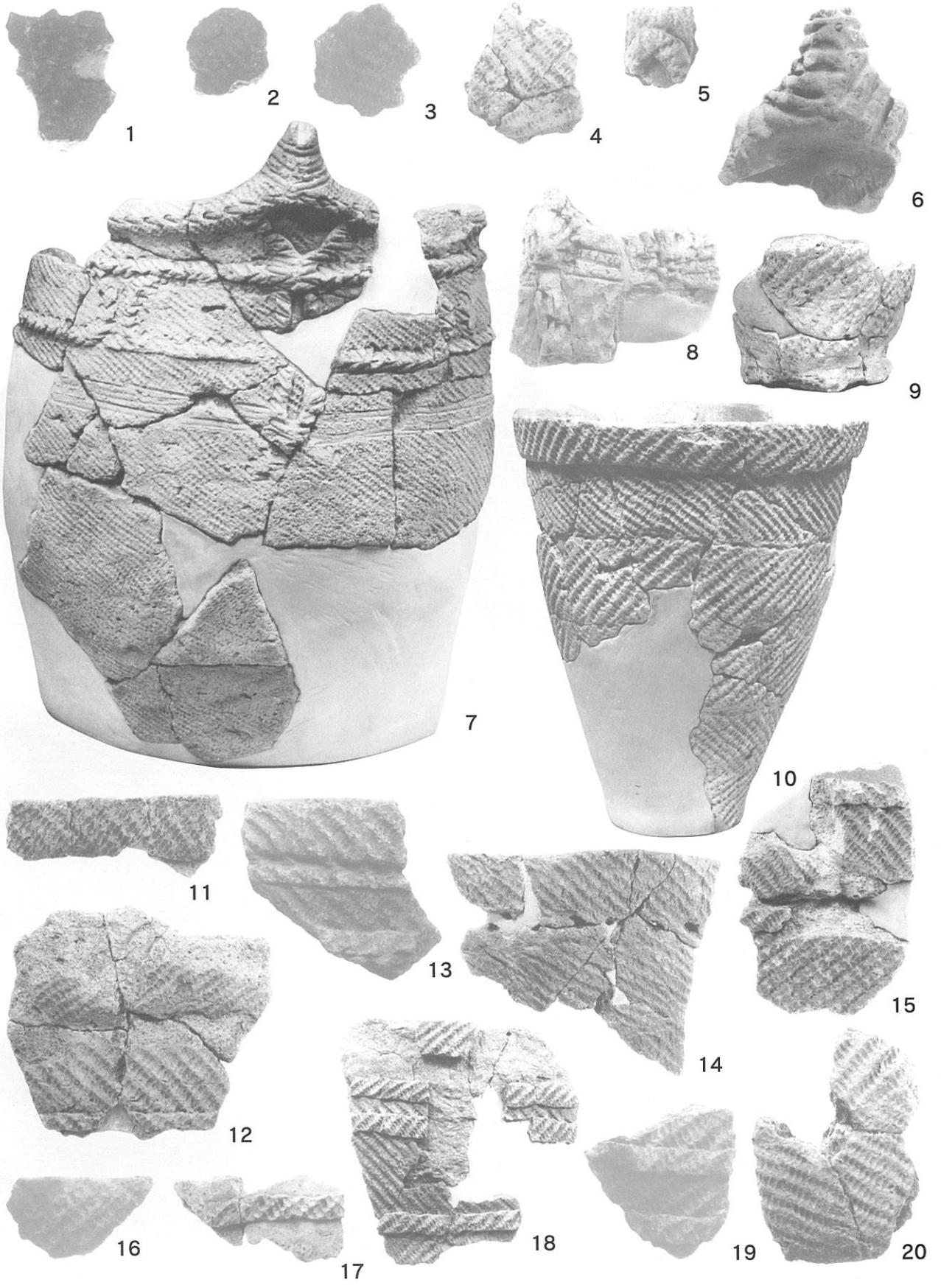
VP-02 堆積状況



Vb層 配石遺構



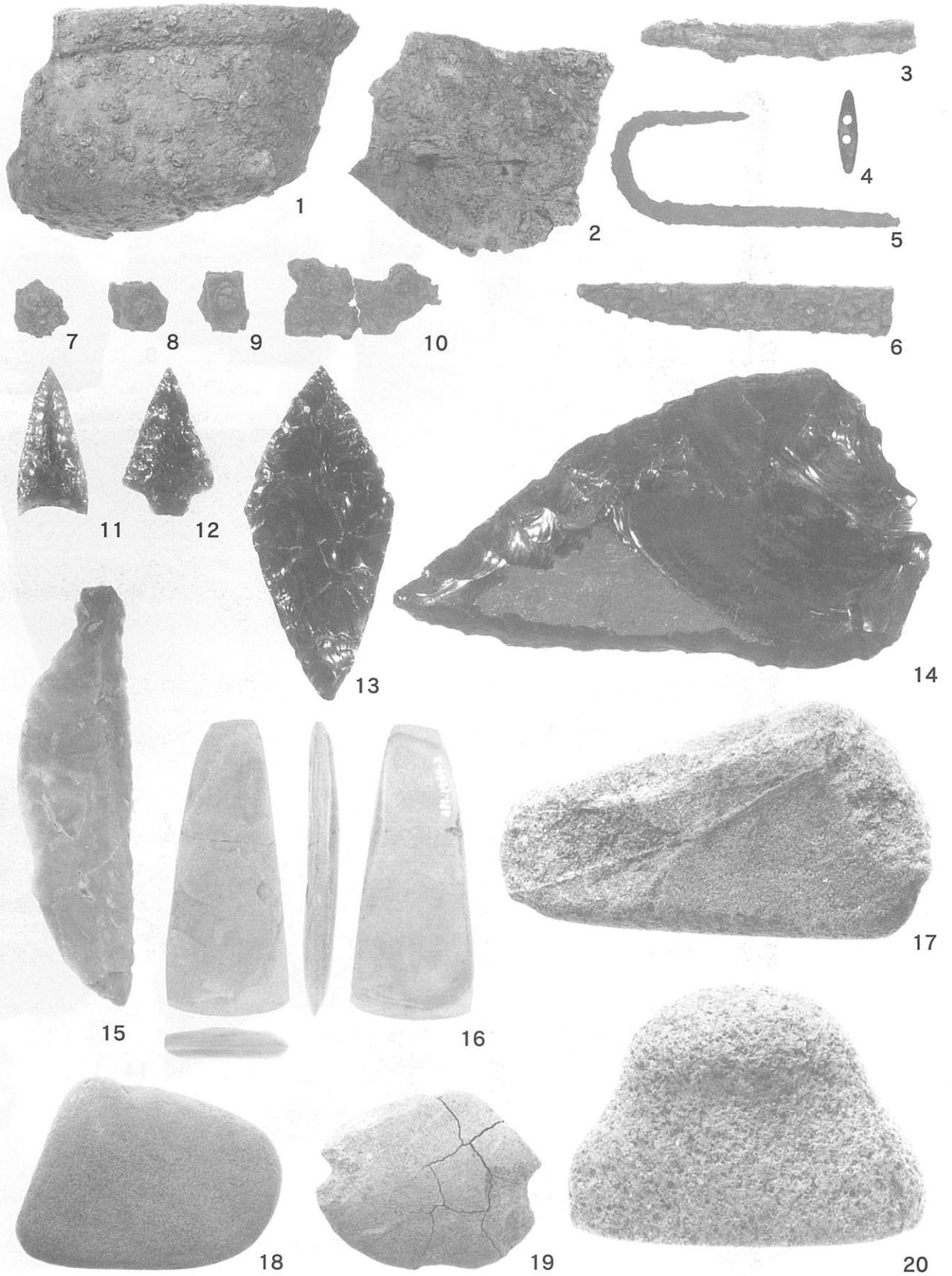
Vb層 土器出土状況



厚幌1遺跡 出土遺物 (1)

1~6.8.13.16.17.19.20 : S=1/2
 7.9.10.11~12.14.15.18 : S=1/3

写真図版 6



厚幌1遺跡 出土遺物 (2)

1 : S=1/4 2.5.6 : S=1/3
 3.4.7~10.16~20 : S=1/2 11~14 : S=1/1

厚幌1遺跡

— 厚幌ダム建設に係わる一般道道切替工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書 —

発行日 平成15年3月17日

編集・発行 厚真町教育委員会

〒059-1601 北海道勇払郡厚真町京町165-1

電話 (01452) 7-2321(代)

印刷 苫小牧印刷工業株式会社